

常型胆嚢癌に比べ、*K-ras* の変異が高いことが知られている。

近年、いくつかの癌で p53 遺伝子の特異的変異様式が知られてきた。しかし、合流異常型胆嚢癌に特異的な p53 遺伝子変異の報告はない。

2. 目的

合流異常の合併の有無による胆嚢癌の p53 変異の特徴を検討する。

3. 方法

外科切除された合流異常合併胆嚢癌17例、非合併胆嚢癌22例の p53 exon 5 から 8 までを PCR-Direct sequense で検索する。

4. 結果

合流異常型は17例中8例(11パターン)に p53 変異がみられ、通常型22例中11例(13パターン)に変異がみられ、両群共に、Mutation hot spot はみられなかった。合流異常型の p53塩基置換様式はすべて G:C pair の Transition type で CpG site の変異も 27.3% にみられた。通常型は Transversion type が 30.8% にみられ、CpG site の変異はみられなかった。

5. 考察

p53 変異は合流異常合併胆嚢癌でも高頻度に認められ、その Carcinogenesis において重要な役割を担っていると考えられた。合流異常型の p53 変異様式は通常型の胆嚢癌の変異と違い、spontaneous mutation のパターンが多くみられ、通常型と違った発癌経路をとることが示唆された。

特 別 講 演

腸管と肝に存在する T 細胞  
—その分化と調節—

新潟大学医学部医動物学教室教授

安 保 徹 先生

第69回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成10年 4月25日(土)

午後 1時30分開会

場 所 ホテルディアモント新潟

地下1階 鶴の間

I. 一 般 演 題

- 1) 甲状腺機能障害・選択的低アルドステロン症(Ⅱ型)・好酸球増多症を伴った高齢者悪性褐色細胞腫の1例

大山 泰郎・市川 喜一(県立がんセンター)  
塩路 和彦・加藤 俊幸(新潟病院内科)  
佐藤 幸示(県立小出病院内科)

【症例】76歳男性。40歳台に甲状腺機能亢進症で治療歴あり。1992年、左副腎褐色細胞腫(径20cm大)で胃膵脾合併切除。1997年11月、腰痛・食欲不振を主訴に入院。各種画像検査で多発性肝・肺・骨転移を認め、<sup>131</sup>I-MIBG シンチ・尿中メタネフリン高値などにより悪性褐色細胞腫と診断。経過中好酸球増多が出現。甲状腺機能は低 T<sub>3</sub> + 潜在性機能低下症型。脱水改善後、腎機能正常にもかかわらず低 Na・高 K 血症が持続し、レニン・アルドステロンとも低値で選択的低アルドステロン症Ⅱ型と考え、輸液中の Na 増量により電解質異常は軽快した。高齢・全身状態不良のため対症治療行っても敗血症・肺炎などを併発し死亡。

【考案】褐色細胞腫は組織学的に良悪性の鑑別が困難で、臨床的に遠隔転移の出現をもって悪性褐色細胞腫と定義される。複数の内分泌異常など種々の合併症を有し、興味深い経過を辿った高齢発見悪性褐色細胞腫の1例を経験したので報告した。

- 2) 褐色細胞腫に対する腹腔鏡下副腎摘出術

渡辺 竜助・武田 正之  
車田 茂徳・藤本 浩明(新潟大学)  
波田野彰彦・高橋 公太(泌尿器科)  
郷 秀人(済生会三条病院泌尿器科)  
森下 英夫・小池 宏(長岡赤十字病院泌尿器科)

我々は1992年より副腎腫瘍に対する腹腔鏡下副腎摘出術を開始し、1996年に副腎褐色細胞腫にも適応を拡大し、現在までに6症例(右5, 左1)を経験したので報